



地域スポーツクラブの持続的活動を可能にする要因

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二本柳, 歩花, 山本, 悟, 越川, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000211

地域スポーツクラブの持続的活動を可能にする要因

二本柳 歩 花¹・山 本 悟²・越 川 茂 樹²

¹北海道教育大学教育学研究科高度教職実践専攻 ²北海道教育大学釧路校保健体育研究室

A Study on Factors that Enable Sustained Activities of Community Sports Clubs

NIHONYANAGI Ayuka¹, YAMAMOTO Satoru², KOSHIKAWA Shigeki²

¹Advanced Teacher Professional Development, Graduate School of Education, Hokkaido University of Education

²Department of Health and Physical Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要旨

本研究は、地域スポーツクラブの継続的活動を可能にする要因について明らかにするため、20年以上の活動を行っている地域スポーツクラブを対象として参与観察を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 研究の対象となったクラブはチームスポーツではあまり見ることのない、「弱い結びつき」で結ばれているクラブであることが確認できた。同クラブ、互いを干渉しすぎずにミニバレーボールを楽しむことのできる環境にあり、「開放的」「横断的」な集団であるからこそ、誰もが気軽に参加することが可能となっている。
- 2) 母親クラブの会長であるKさんは、「顔の広い」人物であり、様々なコミュニティに自分の居場所をもっていて、誰からも信頼されるような人物である。そのような人物が、施設を借りている児童館の方やメンバーとコミュニケーションをとることで、組織を安定して運営してくれているからこそ、このクラブは継続をしていくことが可能になっている。
- 3) クラブ活動内の関係性が成り立っているのは、機能集団のような互いの結びつきが強く、出入りが難しいクラブではなく、互いが参加できるときに気楽に参加できるという認識のもとで「信頼」や互いに干渉をすることが少ないからこそ、関係性が崩れ、クラブ活動の継続が危うくならないという「心理的安全性」が成り立っている。ゆえにこのクラブは持続が可能になっている。

I. 序

地域のスポーツ活動を効果的に展開する上で、「総合型地域スポーツクラブ」の存在が重要になることは言うまでもない。総合型地域スポーツクラブとは「人々が、身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、子供から高齢者まで（多世代）、様々なスポーツを愛好する人々が（多種目）、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）という特徴を持ち、地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブである」（スポーツ庁HP）。我が国における総合型地域スポーツクラブは、平成7年度から育成が開始され、平成29年7月には、創設準備中を含め3,580クラブが育成され、それぞれの地域において、スポーツの振興やスポーツを通じた地域づくりなどに向けた多様な活動を展開し、地域スポーツの担い手としての役割や地域コミュニティの核としての役割を果たそうとしている。しかしながら、平成26年度のスポーツ庁の「総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果」によると、総合型地域スポーツクラブをめぐる課題として、主に、指導者の確保、活動に係る経費、自治体や学校との連携、会員数の確保があげられている（図1）。法政大学スポーツ健康学部が10年間かけて大学や自治体と連携を取り総合型地域スポーツクラブを作り上げた事例では、総合型地域スポーツクラブの拠点を大学としていることより、人材の確保や活動拠点について課題は少ないものの、その反面、財源に関しては大学への依存度が高いため、大学への負担を軽減していくことが求められている（荏部, 2021, p.8）。

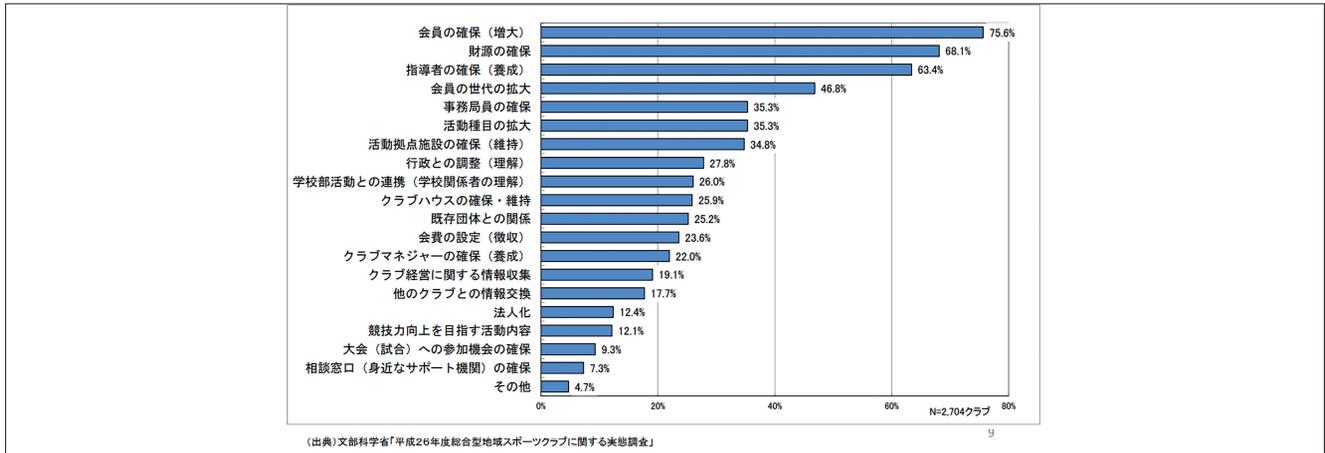


図1 総合型地域スポーツクラブの活動に関する課題

さらに、村瀬ら（2022）は、近年の総合型クラブ数の動向に着目すると、創設準備中のクラブを含む育成クラブ数は増減を繰り返しつつ横ばいであり、クラブ育成率は直近の3年間に於いて僅かながら減少していると述べている（図2）。廃止クラブに至っては他の項目に比べ、年々著しく増加していることを示した上で、過渡期を迎える総合型クラブが、従来にも増して地域に根ざしたスポーツ環境、及び地域の課題解決を担う「社会的な仕組み」として定着し機能していくことは、地域スポーツの今日的課題であると捉えている（図3）。

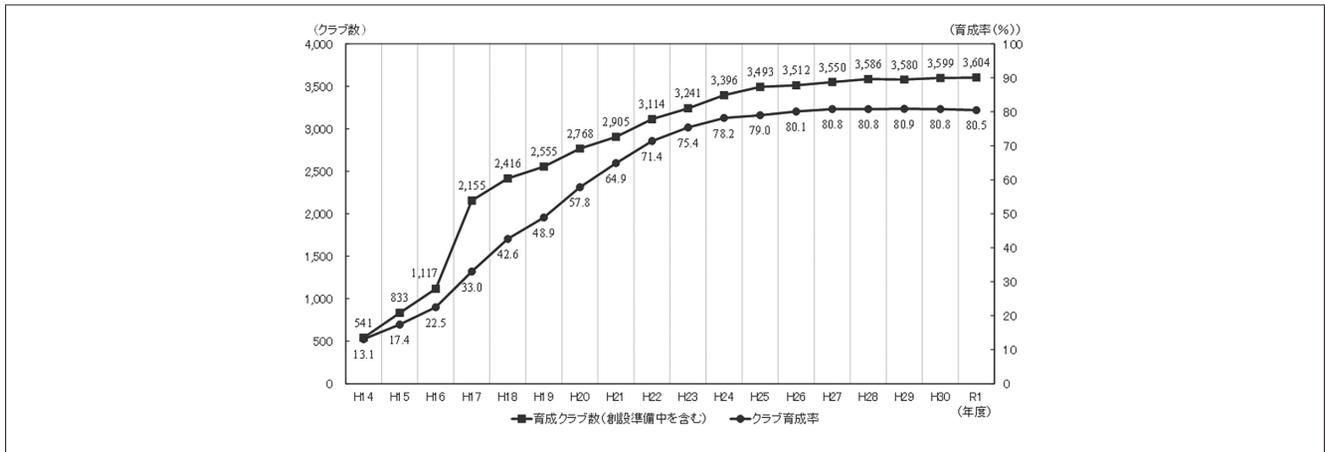


図2 総合型地域スポーツクラブ育成状況の推移

(スポーツ庁、総合型地域スポーツクラブ育成状況推移、2020 を一部改変)

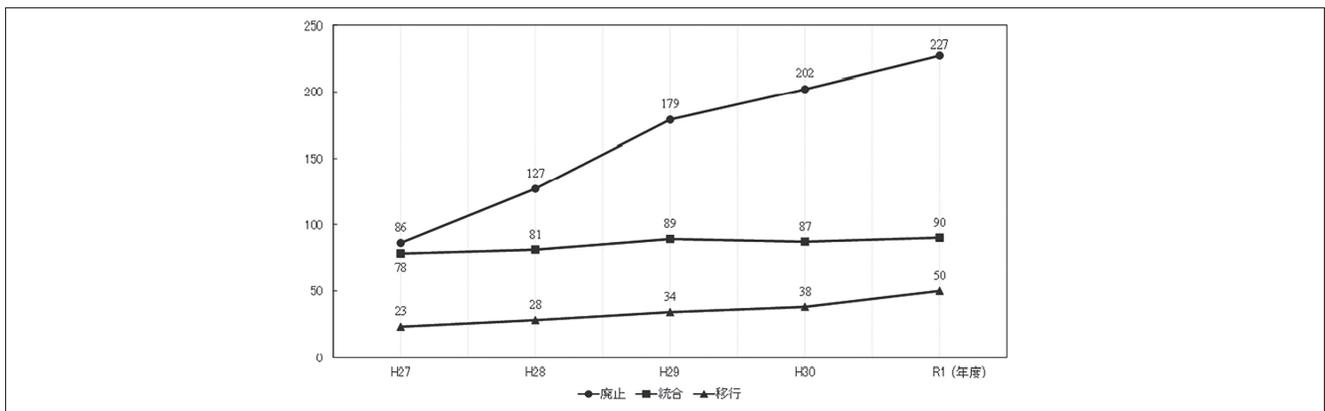


図3 廃止・統合・移行クラブ数の推移

(スポーツ庁、『総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果概要』2016-2020 をもとに筆者作成)

実際、K市の総合型地域スポーツクラブについても、ホームページなどを開設しているスポーツクラブは少なく、アクセス方法が限られていて、気軽に参加するのが難しい。周りに総合型地域スポーツクラブの関係者であったり、参加者がいなかったりする場合、直接代表の方に電話するか、市役所のスポーツ課の方と連絡をとってつなげてもらう方法となる。しかし、電話でのやり取りや知らない人と予定を確認し合うのはハードルが高いだろう。他にも、現状として年齢が制限されていたり、学校の施設を借りて行うので、学校行事や状況に左右されてしまったりして、活動を定期的に行えていないスポーツクラブの現状が認められる。

それゆえ、クラブ活動の継続が長いクラブ、つまり持続可能なスポーツクラブはいかにして成り立っているのか、どのようなことがクラブを継続していくうえで大切なのかを探ることに研究の意義がある。

II. 研究目的

本研究では、20年以上の歴史のある一つのスポーツクラブを事例として、持続的活動を可能にする要因を明らかにすることを目的とする。

III. 研究方法

1. 調査対象

K市のクラブ

継続期間：20年以上

場所：K市内の児童センター

活動時間：毎週火曜日 午前10時から12時（夏季休業や冬期休業時は児童センターが使用できないため休み）

年齢層：中学生から大学生の子どもがいるお母さん方が多いが、男性の方や20代前半の人たちも数名参加している

年会費：年間1,000円で保険料が190円で年間合計1,190円

道具などは児童館の予算などから補填している

2. 研究方法

調査の対象となるK市のクラブに参加し、参与観察を行う。参与観察とは、「社会調査研究者が、自分の参加している集団の一員になりきり、その集団の生活にすっかり溶け込んで参与している状況のこと」（ミッチェル,1983,p.215）である。その後、参与観察で集めたデータからエスノグラフィーを書いていく。エスノグラフィーとは、そのフィールドを知らない読者に対して、フィールドの人々がどのような意味世界に生きているのかを理解してもらうために書くものである（箕浦康子, 2009, p.2）。

エスノグラフィーには3つの用例があり、1つ目に「フィールドワークの結果をまとめたもの」、2つ目に「フィールドワークのプロセスそのもの」、3つ目に「少し古い用法で民族誌学ないし「記述民族学」を意味する。本研究では1つ目の「フィールドワークの結果をまとめたもの」という用法で観察の結果をまとめていく。

エスノグラフィーを書き進める作業は、大きく2つに分かれる。まず、膨大なフィールドノーツの生データを分析して第1仮説を得る段階、次いで自分の知見を先行研究と比較検討し、フィールドから得た知見をもう少し大きな理論枠組みの中で解釈する段階である。

第1仮説を得るためのプロセスで、分析の対象になるのはフィールドノーツ、ビデオ、写真などの記録である。フィールドワークで得たデータから何らかの仮説を析出する理論化のプロセスとは、観察下の事象を説明するための概念カテゴリーを生成し、カテゴリー間の関係を発見することである。仮説とその解釈を合わせたものを知見という。フィールドワークをある程度書き進めた時点で自分の研究関心とフィールドで繰り返し現れる事象との関係を検証し、リサーチクエストを組み直して、新しい問いに焦点化した観察を継続する。

次の段階で最初に行うのは、分析結果を解釈することである。「解釈する」とは、参与観察で書き進めた、フィールドノーツを分析することで得られた知見を理論的に考察することである。類似分野の先行研究の知見と比較し、フィールドの特定性を越えて推論を、分析の知見を越えてあれこれ思いめぐらし、より広い理論的視野のなかに自分の分析結果を位置付けることで、自分の知見を別の新しい視角から眺めてみるメンタル作業である。この段階では仮説検証に必要なデータしか集めないが、フィールドワークでは、何がどのように関係しているかがわからないという前提で、多様な事象とその文脈をフィールドノーツに記載する。ある程度フィールドワークが進んだら、文献を読み始める。テーマを1つか2つに絞り、テーマに沿った分析のエッセンスを示すようなエピソードをフィールドノーツから抜粋して論文に挿入することで、析出した分析概念がフィールドの中でどのように現れているかを資料や文献と織り交ぜながら書いていく。理論化に向けての考察では、各テーマを統合するような仮説を立てて、その理論化の意味を発展させ、独自の理論世界を構築させる（箕浦

康子, 2009)。

3. 調査手順

調査対象となるクラブに参加し、最初の3回程度は先入観を持たず、その活動時間にあつたことを網羅的に書き出した。その後、自分の気になる点を絞り込み、「活動が続いている要因」というところに焦点を集めて活動の様子を参与観察していった。その後、参与観察して得られた情報をまとめ上げるために、参加者の気になった行動や発言を文献や資料と結び付けてエスノグラフィーを書いていった。エスノグラフィーを書き進めながらも、疑問に思ったことや結論付けるのに情報が少ない部分が多いため、クラブでの参与観察を並行して続けていった。

IV. クラブ活動

1. 気楽なクラブライフ

クラブには、8人から12人程度が所属している。そのうち、ほぼ毎回参加をしているメンバーは7人ほどである。それ以外のメンバーはクラブに来たり来なかったりすることが多く、自分の時間があいていたら参加するというスタイルの人が多。参加者のほとんどが、中学生以上になる子どもがいる母親であり、子育てにかかる時間が少なくなり、時間に余裕が出てきた人たちが参加している。自分の生活リズムとクラブの活動時間や内容がマッチしていることがクラブに所属し活動している理由の一つとなっている。

クラブ活動内の会話は、最近の出来事や、子どもの話、仕事の話がほとんどで、ミニバレーボールに関する会話はほとんどない。チームスポーツにありがちな機能集団であれば、「最近カットうまくなってきたよね」とか「どうやったらあのコースに打てるようになるの」と言った技術的な会話がうまれることはごく自然であろう。しかし、このクラブではそういった会話はほとんど見られない。このことから、クラブのメンバーはミニバレーボールの技術向上を求めて参加しているわけではない。だからと言って、自身の話をするだけのためにクラブに参加しているわけでもない。ゲームの間の休憩時間は水分を取るぐらいの時間で、チーム決めができたらずぐにゲームをはじめ、時間いっぱいミニバレーボールをしている。ゲーム中に一番盛り上がるのは、長くラリーが続いたときで、点を取った方も取られた方も「楽しかった」とか「すごい忙しくて大変だったよ」と嬉しそうに話していることが多い。これらの言動から、バレーボールの魅力に触れ、各々が楽しんでいることがうかがわれる。ミニバレーボールをしないと集まることはないが、競技性を重視しているわけではないのである。

クラブの活動を1, 2週休んでいた人が「久しぶり」という言葉を発していたり、「この前、たまたまスーパーで会ったよね」という会話をしていたりするのを耳にしたことがある。クラブのメンバーは、普段それぞれのコミュニティで生活しており、個々で仲が良かったとしても、クラブ活動以外の接点はあまりないようである。ソーシャルネットワーク論によると、そのネットワークの結束の形態は「結束型」と「橋渡し型」の2形態に分類されている。「結束型」は組織内部における人と人の同質的な結びつきを意味し、内部での信頼や協力関係、強力な絆を生むものであるのに対し、「橋渡し型」は、異なる組織間における異質な人や組織を結び付けるネットワークであると位置づけられる(大江比呂子, 2004, pp.12-13)。

このクラブのメンバーの結びつきを見たとき、それは「橋渡し型」に該当すると考えられる。一般的に、スポーツのクラブチームは機能集団であり、「結束型」に分類されることが多い。例えば日本の部活動などが代表的な例になる。チームで一つになり、長い時間を共に活動し、同じ目標をもって日々活動を続けているような関係性は「結束型」に含まれる。Sen (1999) は、「結束型では、社会ネットワークにおける相互作用が行き過ぎた内部的思考は、異質なものがネットワーク内に侵入することを排除する可能性を意味している」と述べている。図4は軍隊や官庁のようないわゆるツリー組織の絵に対比させたものであるようにも見えるが、そこに表現されているのはスタティックで古い文脈によるネットワークのイメージであるように思われる。このことは、図4のように自己がすでにそれ自体独立に存在していて、それぞれの立場から互いの情報を交換している状態である。つまり、このような関係性は、スタティックな情報を介したものであり、そこには関係の中で自己を再解釈していくというコミュニティのダイナミックな進み方が感じられない。このような集団では、それぞれがもつ役割が明確化しており、強い結びつきでつながれている。そのため、新しく入ってくる他のメンバーを快く迎え入れる環境をつくることができないことや、ネットワークから抜けることが難しくなる可能性が生まれてくる(図4)。

このクラブでは特に指導者を持つことや、大会に参加することもない。活動の目標などは特になく、個人それぞれが様々な目的や理由をもってクラブ活動に参加している。さらに活動は週1回2時間であり、クラブ内での会話などからこのクラブ活動外ではほとんど会ったり、コミュニケーションを取ったりしていないようである。「橋渡し型」は「開放的」「横断的」であるため、異質な情報や構成への受容性が高く、異質な情報や外部のアクターへの受容性が高く社会の潤滑油と

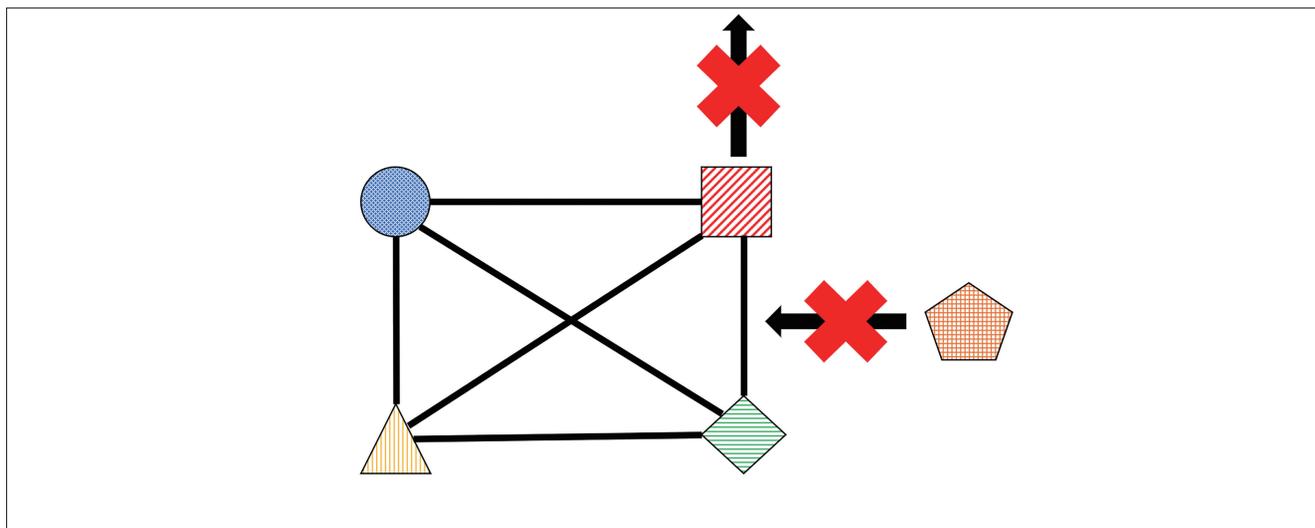


図 4. 結束型のバレーボールクラブの図

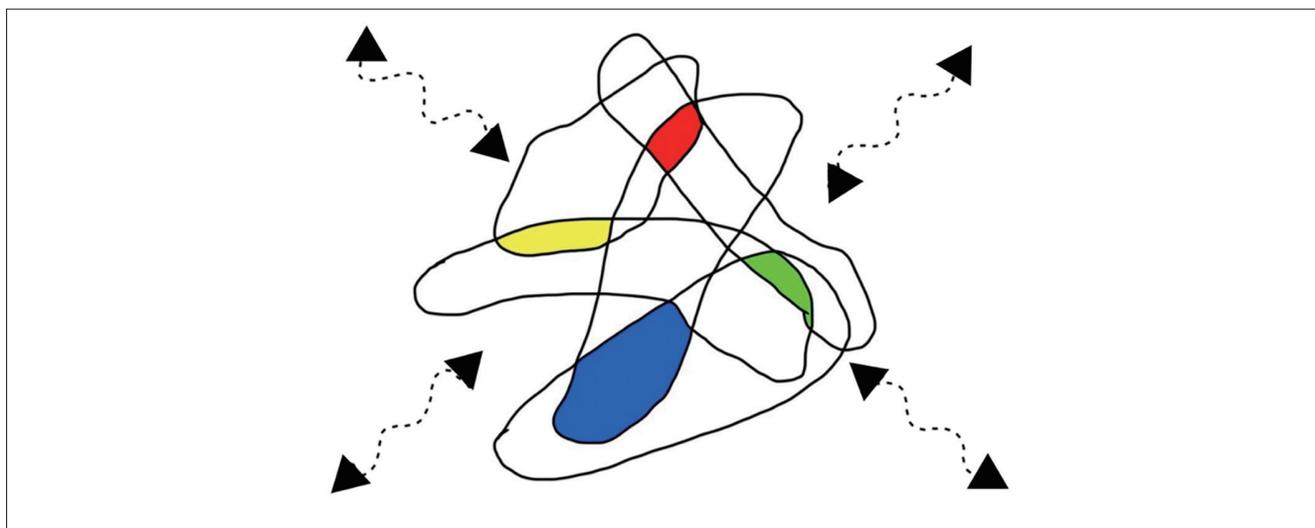


図 5. 橋渡し型のバレーボールクラブの図

もいうべき役割を果たしうると位置付けている（大江比呂子，2004，p13）。このようなクラブの状態を図5のように表した（図5）。この図は、図4でのノードに対応するもの、つまり自己がもつすべての関係の重なりとして捉えている。それは、自己というものは完成された形でア prioriに存在するのではなく、自分の持つ関係性のうち一つでも変われば自分の形も変わってしまうような流動的で、基本的な不安定さを内包したものである。自分の居場所、立場が様々な形や関係性に変換ことができ、コミュニティに出入りすることが容易であるということを示している。具体的な意志の強い目標がなくてもクラブとして成り立っているのは、こうしたゆるい結びつきが背景にあると考えられる。

このクラブでは、会員として所属している人は比較的毎回参加している数名であり、そのほかは会員としてではなく、便宜上見学や遊びに来ているといった扱いのようにしており、参加者の出入りが多い。実際、夏休みや冬休みで時間が空いているバレーボール経験の少ない子どもを連れてきて一緒に参加する親がいたり、他の地域のクラブの人が遊びに来たりすることもあった。調査したクラブでは、そういった、いつもは来ないような人（異質な人）を受け入れようとする雰囲気が強く、ゲーム中、立ち位置がわからなそうな人がいたら「ここにいらいいよ」や、休憩時間に「夏休みはいつまで？」などと声をかけてくれて、自然と居場所をつくりやすい環境だった。来られるときに来るような人が多く、参加したら人数が増えてにぎやかになるから歓迎され、来なくても迷惑がかかるわけではないので、育児やけがなどで何年か来ることができていなかった人が来ても、すぐになじめるような環境が成り立っている。

新しく入ってくる人や、久しぶりに来る人もメンバーの誰かの知り合いであることが多く、クラブのメンバーと結びつきのないメンバーが急に参加することはなかった。今井、金子（1988，p186）は、女性のネットワーク間の情報伝達がどのようにして行われているのかを調査した社会学者の上野との会話の中で、女性のネットワークは定期的な出版される

会報や、いろいろなネットワークの代表の集まりである協議会とかという、いわば意図的でネットワーク単位のメディアを通じてではなく、二つないし、それ以上のネットワークの重なり、つまり両方のネットワークに属する個人を通じて行われていることが認めている。そのため、初めてくるときの抵抗感は少ないし、クラブのメンバーの知り合いは、快く迎え入れたいと思えるような関係性がつくられている。ママさんバレーボールをする仲間として受け入れたいという気持ちがこの心地よい環境をつくっているのだと考える。

2. コミュニティ維持を可能にするキーパーソンの存在

クラブの中心人物であるKさんは母親クラブの会長でありながら、日々様々な場所で仕事をしている。1日にいくつつか掛け持ちしている仕事場に行っており、クラブには仕事の間の時間を使って参加しているため、なかなかスタートの時間に来られることが少ない。時期によっては昆布を干す仕事などにも地方から呼ばれ、片道40分かけて朝早くから仕事をしているとのことだった。さらに、子どもが4人いるため、長い間学校や地域との関係をもち、今でもなお、児童センターの会長として、地域に貢献し、様々な人と関わっている。このように多様なコミュニティに自分の居場所をもっており、人から必要とされ、頼りにされている存在であるということが認められる。

一見ランダムに見える人間の関係は、家族、所属組織、企業、同窓会、居住地域などにより、ところどころに密接なクラスターが存在しており、それらが結節していると考えるのが自然である。実際私たちが「世間は狭い」と感じるのは、親密で強固なクラスター以外に、その間に架橋するような「顔の広い」人間が介在しているからだといわれる（松尾2004）。また、宮島（1994）は「当の集団の外部にどれだけ参加可能な人間関係をもっているかということが、広い範囲の社会参加の可能性を左右することになり、より重要でもある」と指摘している。後藤（2009）は「総合型の運営に大きな影響を及ぼすリーダーの多くは土着性の強く、公共化の志向性と自治意識の強さがうかがえる」と述べている、Kさんはこのような見解に符号する、総合型の運営に大きな影響を及ぼすリーダーであるといえる。

Kさんについて印象深いエピソードがある。それは、年内最後のクラブ活動の日（2022年12月20日）に、Kさんのタイヤがパンクしてしまった。普通ならグループメールに一報をいれて、お休みするものの、Kさんは児童センターに電話をして、「今年最後の活動なので、遅れるけど必ず顔を出します」と、みんなに伝えてもらうようお願いしていた。そして、終わる20分ほど前に、顔をだしてきてくれて、「遅れちゃってごめんね。さめているかもしれないけれど、どうぞ」と言いながら、たい焼きの差し入れまで持ってきてくれた。みんなは「ゲームできる時間はないのに、わざわざ顔を出してくれてありがとう」「大変だったのにありがとう」と感謝の言葉をかけていた。このように、連絡をするときはみんなに伝わるように気を使い、年内最後に顔を見て挨拶をしたいというKさんの真面目で、責任感が強く、みんなから信頼されるような人柄であることがうかがえる。

また、何人かに「どうしてこのクラブに来るようになったんですか？」と尋ねると「Kさんに誘われたから」という人が2,3人いた。現に私がこのクラブを選んだ理由のうちにKさんとバイト先の知り合いで、何度か誘っていただいていたため、このクラブに参加することにした。そのように様々なコミュニティに自分の居場所があるような「顔の広い」人は人間関係のネットワークをつなぐことに非常に効果的で大きな意味を持つと考えられる。

社会ネットワークの分析においては、「ノード (nodes)」と「つながり (ties)」という視点から社会的関係性をみる。ノードとは、ネットワークに関わりを持つ行為者 (actor: アクター) を指し、つながりとは、アクター間の結びつきを表すものである。Burt (2000) は、集団 (clique: クリーク) 間を結ぶブリッジ形成能力に関して「構造的ホールに着目」し、そのホールに人工的に橋を架けることで操業機械、すなわちビジネスチャンスが生まれる点を強調した。Burtによると、異なるクリーク間にはこうした架橋能力が強いアクター (Kさん) が、ソーシャルキャピタルを潤沢にすることを意味している。

V. 結論

本研究では、総合型地域スポーツクラブの持続に課題があるという報告がある中、約20年もの間続いているというママさんバレーボールクラブで参与観察を行い、活動を持続することができている背景を読み取ることで、他のクラブ活動の持続の参考になるのではないかと思いこの研究を進めた。研究を進めていく中で、以下のことが明らかになった。

- 1) 研究の対象となったクラブはチームスポーツではあまり見ることのない、「弱い結びつき」で結ばれているクラブであることを確認できた。同クラブでは互いを干渉しすぎずにミニバレーボールを楽しむことのできる環境にあり、「開放的」「横断的」な集団であるからこそ、誰もが気軽に参加することが可能となっている。
- 2) 母親クラブの会長であるKさんは、「顔の広い」人物であり、様々なコミュニティに自分の居場所をもっていて、誰からも信頼されるような人物である。そのような人物が、施設を借りている児童館の方やメンバーとコミュニケーションをとることで、組織を安定して運営してくれているからこそ、このクラブは継続をしていくことが可能になってい

る。

- 3) クラブ活動内の関係性が成り立っているのは、機能集団のような互いの結びつきが強く、出入りが難しいクラブではなく、互いが参加できるときに気楽に参加できるという認識のもとで「信頼」や互いに干渉をすることが少ないからこそ、関係性が崩れ、クラブ活動の継続が危うくならないという「心理的安全性」が成り立っている。ゆえにこのクラブは持続が可能になっている。

文献

D.ミッチェル編：下田直春監訳(1983)新社会学辞典.新泉社,p.215.

後藤貴浩（2009）総合型地域スポーツクラブにおけるリーダーの社会関係資本に関する研究. 熊本大学教育学部紀要 人文科学58, pp.41-50.

濱嶋朗・竹内郁朗・石川晃弘編（2005）社会学小辞典【新版増補版】. 有斐閣. p.161.

今井健一・金子郁容（1988）ネットワーク組織論. 岩波書店.

苅部俊二（2021）特定非営利活動法人総合型地域スポーツクラブ法政クラブ10年の足跡と課題. 法政大学スポーツ健康学研究12, pp.1-9.

上村 英樹（2010）総合型地域スポーツクラブ事業の現状と課題. 都市政策研究所. p49-53

箕浦康子（2009）フィールドワークの技法と実際. ミネルヴァ書房.

村瀬仁志・神野賢治・田島良輝（2022）総合型地域スポーツクラブに内在する社会価値の探索的研究－ソーシャルキャピタルを形成する事業体の検討－. 富山大学人間発達科学部紀要, 16(2)：111-125.

文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課（2015）総合型地域スポーツクラブの現状と課題.

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/025/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2015/05/01/1357467_2.pdf)

中村尚司・広岡博之（2000）フィールドワークの新技法. 日本評論社, pp.6-8.

大江比呂子（2004）サステナブル・コミュニティ・ネットワーク. 日本地域社会研究所.

スポーツ庁（2022）総合型地域スポーツクラブに関する実態調査の結果について.

山住勝広・ユーリア・エンゲストローム（2008）ネットワークング 結び合う人間活動の想像へ. 新曜社.